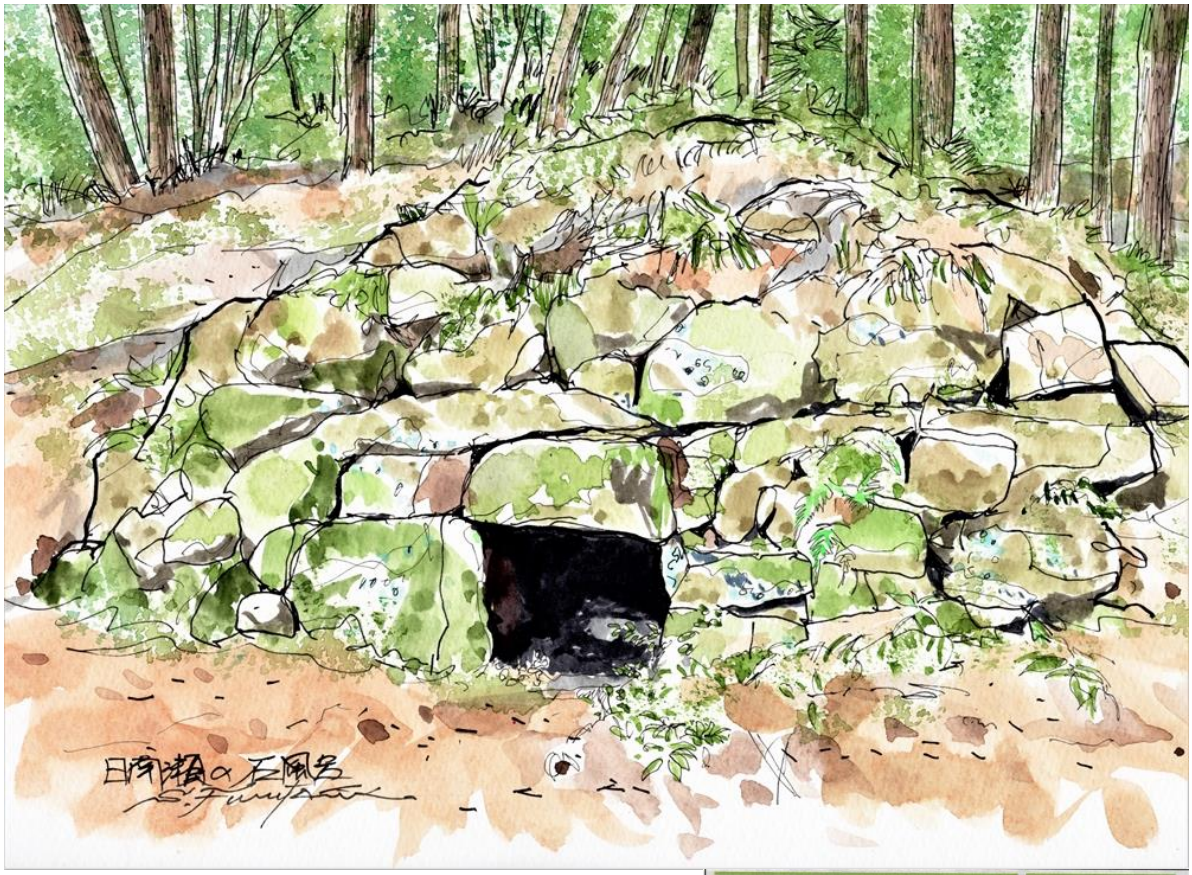
今日のイラスト 365「 イラストでたどる萩往還⑯ 日南瀬の石風呂」　　古谷眞之助



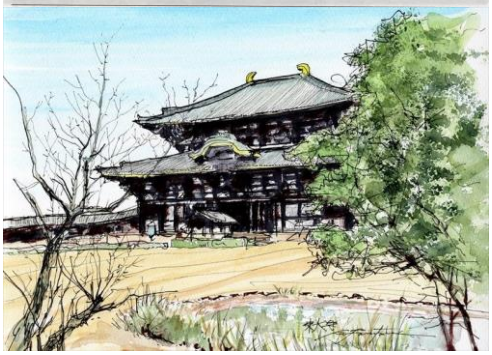
イラストでたどる萩往還 16　日南瀬の石風呂

文・イラスト＝古谷眞之助

石風呂というと東大寺を再建した重源上人が設けたという徳地のそれが有名だが、日南瀬の休憩所には復元された石風呂がある。これは花崗岩で作られ、エスキモーの氷の家・イグルーに似ていて本物とはほど遠い。一方、日南瀬バス停近くには、かつて使用されていた本物が現在でも残っている。イラストはその本物を描いたものである。

かつては、中で火を燃やして底の石を焼き、そこに萩の海岸から運んだ海藻を敷いて体を横たえたと伝えられる。つまり、現在のサウナに近いものと考えて良いだろう。もちろん、萩往還の旅人のためのものではなく、日南瀬付近の農民の憩いのために造られたものだった。





石風呂と言うと、思い出すのは俊乗坊・重源上人である。彼は後白河上皇から東大寺再建のための大勧進に任命され、当時、大木の産地として有名だった周防の国（ 山口県東部 ）徳地の杣山（ そまやま ）から木を切り出すことに決める。木は直径 1.6m、長さ 40m 近くあったと言われており、そのまま運搬するには長過ぎるので、実際に使用される箇所に応じて予め必要な長さに切断して運ぶという「プレカット方式」が用いられた。それでも大変な大きさである。切り出した木材の尾根越えには大型の轆轤(ろくろ)が用いられた。轆轤といっても、焼き物を作る時に使用されるものではなく、海岸で船を陸に引き上げる時に使用される「巻き上げ機」のようなものである。また、山から運び出された木材は佐波川へと投げ込まれた。上流部は川幅が狭く水深も浅いことから川を数か所で堰き止めて木材を浮かべ、堰の一部を開くことで勢いよく下流へと運んだ。この堰のことを「関水」と言い、現在でも佐波川上流にその跡を見ることができる。徳地から海岸の防府三田尻まで運び出された木材は、そこから瀬戸内海を経て淀川を上り、さらにそこから陸路で奈良へと運ばれた。現在のようにチェーンソーや重機があるわけでもなく、伐採、運搬は想像を絶する作業だった。上掲の技術は、３度中国(南宋)に渡った重源が導入したもので、彼は実際の作業には中国人の工人・陳和卿(ちん・わけい)を招聘して指揮を執らせた。彼なくしてこの大業は果たし得なかったと言われている。当然、伐採、運搬には人々が作業に従事した。その彼らの疲れた体を癒すものとして重源上人が佐波川流域に作ったのが「石風呂」なのである。

この石風呂には、今でも体験入浴することができる。私自身は体験したことはないが、（ 閉所恐怖症なので苦手 ）県内では、アジサイ寺として有名な防府の阿弥陀寺、そして佐波川上流の「岸見の石風呂」「二ノ宮の石風呂」、そして「徳地青少年自然の家」などである。関心ある方は是非お試しあれ。（ 2020.7.22 記 ）